



## 富士山南面森林調査活動

「富士山にこんなにたくさんの種類の巨木があるなんて...」、COP10 で当クラブ展示ブースやフォーラムに来て下さった皆さんの感想です。多様な生物が生きる豊かな富士山の森の再生と保全を目指し、この調査活動が行われています。

富士山の国有林の面積は約一万二千ヘクタール、静岡県側の標高8000mから3,300mの間に広がっており、山梨県側にはありません。国立公園内だからといって、手つかずの森ではありません。環境省ではなく、林野庁が管轄し、現在その61%が人工林です。戦後の高度成長期、1961年から70年代初めまで、富士山では大規模な拡大造林が行われ、ブナ、ミズナラなどの広葉樹が伐採され、その跡に木材として経済的価値の高いスギ、ヒノキ、カラマツが、そして郷土樹種としてウラジロモミなどが植林されていきました。当時は木材の供給に重点がおかれていましたが、約40年たった今、富士山の森林は、水源涵養の機能、生物多様性の保全、教育やふれあいの場としての重要性が増しています。

この調査活動は、約6平方kmの天然林を調査し、28種類の樹種、1100本の巨木を調査し、データを収集、絶滅危惧種の植物やニホンジカやツキノワグマによる樹皮剥ぎの状況、近年進んでいるササ枯れも記録してきました。全地域を調査し終わるにはあと5年かかる予定です。会員ならだれでも参加できます。年を通じて毎月2回、富士山の森を調査しています。

※この活動はセブン-イレブン記念財団より 2010 年度助成を受けています。



航空写真を活用し、大きな木を探してひたすら歩く。幹周りを地上から130cmで測定、直径3m以上が巨木だ。



GPSで位置や標高を測定し、樹種、生育状況、着生、地面の形状など、詳細に記録しデータ化する。



樹高を測定器で計測。GPS、樹高測定機、双眼鏡などを駆使して、今後の継続調査のために正確な記録を残す。



巨木の周りの笹枯れ状況や植物も記録。絶滅危惧種も見つけることも。熊の爪跡による食害状況も記録する。

### 巨木を見つけたら

### 爪痕

## フォーラム発表資料から



スズタケは10年以上前から枯れが目立ち始めていたが、調査を始めて直ぐに急速に東へ広がっていることが分かった。早く笹が枯れた調査域西側、標高1,500mあたりの現在の様子。

写真撮影：勝又幸宣（調査活動リーダー）



調査記録は調査票の項目として文字データで記録しているものと、GPSのトラックデータから位置を付加した写真で記録している。富士山の森ならではの特徴がわかる。



明治時代、モミ、ツガを製紙チップの原料として大量に伐採。当時の登山記には、「1~2合目は富士製紙（縦つが）切り出しの工夫が常時100人以上が就労していた」とある。混交林にその名残り。



宝永噴火（1707年）の後に再生した落葉広葉樹中心の巨木林。寄生火山の南斜面に、ブナ、イタヤカエデ、イヌザクラ、オオイタヤメイゲツなどの巨木が密集している。